

東京納税貯蓄組合総連合会 会長賞

税金が支える毎日の給食

東京都立三鷹中等教育学校

三年 和田 環希

この夏私は、学校が実施したニュージーランドでの短期海外研修に参加した。現地の中学校を訪れたとき、日本との大きな違いに驚いた。それは給食である。

ニュージーランドでは給食がない学校が多いと聞いていたが、私が通った学校には無償の給食があった。昼休みになると中庭に机がでてそこに給食が置かれる。使い捨て容器に入ったマカロニチーズやチリコンカンライス。パンやチップス、リンゴなどが一緒に配られる。量はちょうどよく、お腹は満たされたが正直、日本の給食に比べると味は単調で、野菜も少なく、栄養バランスも気になった。

改めて日本の給食を思い出すと、その違いがよくわかった。小学校時代は杉並区の区立小に通い、できたてのあたたかい給食を給食調理室で作ってもらっていた。現在通う都立三鷹でも校内で調理された給食を食べている。季節の食材が入り、主食・主菜・副菜・汁物・牛乳がそろう。味だけでなく、栄養や安全までしっかりと考えられている。

調べてみると、日本の学校給食は家庭が払う給食費だけでなく、調理員や栄養士の人工費、給食調理室の設備や衛生管理など、多くの部分を税金が支えてくれていることを知った。戦後の1946年12月、連合軍からの援助物資により東京、神奈川、千葉で試験的に再開された給食制度は、1947年1月からは全国の都市部で本格実施され、子どもの栄養改善を目的とした。1954年には学校給食法が制定され、今も「社会全体で子どもを育てる仕組み」として続いている。

さらに東京都では、給食費の無償化が大きく進んだ。令和6年度から、都が市区町村の給食費無償化を支援する制度が始まり、当初は費用の2分の1を補助していたが、8分の7まで補助率が拡大された。私が通う都立三鷹中等でも、この制度により給食費が無償化されている。しかし、財政力の異なる自治体間で格差が生まれたり、将来への継続性への不安もある。それでも、家庭の負担が減るだけでなく、どの子どもも安心して給食を食べられるようになったことは大きな意味があると思う。

ニュージーランドで体験したシンプルな給食と、日本で日々食べている栄養バランスのとれた給食。その背景に、税金の力があることを実感した。道路や医療だけでなく、毎日の食事や健康までも税金に支えられている。私はこのことを忘れずにいたい。

給食を残さず食べることは、調理してくれる人への感謝を表すだけでなく、無駄な廃棄を減らし、使われた税金を大切にすることにもつながる。そして将来働いて納税することは、次の世代の子どもたちが安心して給食を食べられる環境を守ることになる。給食を通じて、私は税金の役わりを身近に感じることができた。これからも給食を大切にし、生活を支えている税金について学んでいきたい。